争いのニュースを見る度に思い出す言葉がある。

約10年ほど前だったと記憶しているが、日本新聞協会広告委員会が「しあわせ」をテーマに実施した「新聞広告クリエーティブコンテスト」で「ボクのおとうさんは、桃太郎というやつに殺されました。」という作品があった。涙を流した小鬼の姿の絵と子どもの文字から、しばらく目が離せなくなり、頭を殴られたような衝撃を受けたのを覚えている。↗

昔話の桃太郎から、多様性を捉えるにはまず個々の経験や背景に対する理解を深めることだと思う。お父さんが桃太郎に殺されたという事実は、一つの出来事だが、それがどのような文化的背景や歴史的な文脈から生まれたものなのかを考えることが重要だ。日本の伝説や物語には、多くの場合、道徳的な教訓や象徴的な意味が込められている。桃太郎の物語もその一つであり、その背後には様々な解釈や捉え方が存在するのだと思った。

医界サロン

「ボクのおとうさんは、桃太郎というやつに殺されました。」から考える多様性

広報委員　河本　英恵

桃太郎は勇敢さや正義の象徴として描かれ、その一方でお父さんが彼に殺されたという出来事は、力の不均衡や異なる立場や視点の間で生じる摩擦や対立を象徴していると思う。このような視点から、桃太郎の物語は、社会や個人の多様性とそれに伴う葛藤や調和の模索をしていると考える。さらに、この物語を通じて異なる文化や伝統、そしてその中での個々の存在のあり方についても考えさせられた。このような観点から、物語は多様性を受け入れることの重要性や、相互理解の必要性を示唆していると思う。

昔話の終わりは大概、「めでたし、めでたし」であるが、このキャッチコピーの作者は「ある人にとってしあわせと感じることでも、別の人からみればそう思えないことがある。違う視点でその対象を捉えるかによって、しあわせは変わるものだと考えました」とコメントしていた。確かに桃太郎の話では「めでたし、めでたし」でも、その背景に目を向けると「めでたし、めでたし」とは言えない。

私なりにまとめると、世の中の事象は視点を変えれば全く違った考え方になる。正義の味方のヒーローとそれを応援する方の視点の対極にも、それを正義と考える視点がある。それは現実の世界でも同じことが言える。昔話が「終わり」でも現実はそこでは終わらない。この先もずっと時間（歴史）が流れていく。

「ボクのおとうさんは、桃太郎というやつに殺されました。」

どう捉えるか？やはりとても難しい……が、せめて多様性を柔軟に受け入れたいと改めて思った。